

古英詩『アンデレ』(三)

藤原保明訳

まえがき

本稿は三分載の予定で進めてきた古英詩『アンデレ』の邦訳の最終稿であり、全体の三分の一弱に相当する1201行から1722行を収録している。

アンデレは敵から二度目の迫害を受けるが耐え忍ぶ。しかし、三度目の虐待によって、その苦痛は頂点に達し、たまらず彼は神に救済を訴える。四度目の迫害にあうが、神から保護の約束を取りつけたことにより、彼の体の傷はすっかり癒えていた。彼はこのことに気付くと、心も新たに敵に天誅を加える。彼は大洪水の奇跡を起して敵をほぼ壊滅状態とする。しかし、改心した一部の住民の願いを聞き入れ、溺死した若者を死からよみがえらせ、洪水発生の地に教会と神殿を建て、司教を任命して帰路につく。航海中、神の命令により、メルメドーニアに戻り、七日間滞在した後、アカイアに向かって旅立つ。

第十二節の冒頭にある酷寒の冬の描写は太古の昔から厳冬の北方の地を故郷とするゲルマン民族ならではの勝れたものであるが、本稿中の圧巻はなんといっても第十四節の洪水の奇跡を扱った部分であろう。モーセのエジプト脱出時に敵が波に飲み込まれて滅ぶ場面をほうふつとさせるこの部分は迫力と活力に満ちた描写となっている。なお、本稿での訳注は古英詩『アンデレ』(二)、(三)で施したものの以外に限った。丸括弧はこれまでどおり訳者の補足である。

アンデレ

その時、町の住民にのろしが上げられた。戦に勇敢な者たち、大胆な闘士たちは関の声を上げて飛び跳び上がり、槍と盾を携え、戦を求めて大勢の群衆と共に城門の方へと急いだ。すると、万軍の主、力の強い創造主は自分に仕える者に向かって言葉に出して語られた。「アンデレよ、武勇を発揮せよ。大勢の群衆を前にしてしりごみせず、試練に臨んで心を引き締めよ。残虐な者たちが拷問で、冷たい枷でおまえを苦しめる時は迫っている。わしの力がおまえの中にあることを彼らが認めるよう、おまえは自分の存在を示し、目的を確かめ、

決意を固めよ。おまえが打撃を、残酷な一撃を受けようとも、悪行の罪を負った者たちがわしの意に反しておまえの体を死に委ねることはできない。そうはさせない。わしはおまえと共にいる。」(1201-1218)

これらの言葉の後、卑劣な顧問官たちは怒りもあらわに、大群衆と盾を携えた軍勢と共にやってきた。彼らは直ちにアンデレを連れ出し、聖なる男の手をその場で縛った。貴人の中で最も優れた者が彼らの前に姿を見せ、彼らがその勇敢な人物を自分たちの目で確かめた時、群衆の多くはその場での殺戮を渴望した。彼らは後でどのような報いがくるのか全く気にかけなかった。そこで、怒った敵は彼を町中引き回し、彼らでさえ最も恐ろしいと感じる方法で彼を引きずり続けるよう命じた。彼らはこの勇敢な人、信念の堅い者に山の洞穴をくぐらせ、岩の斜面沿いに引きずり回した。巨人たちの太古の仕事である道が続くかぎり遠くまで、町中くまなく、石で舗装された通りを引きずっていった。町の家々からは騒ぎ声が、異教の群衆の大きな喚声が上がった。聖者の体はひどい傷で痛めつけられ、血で濡らされ、骨の館である肉体は壊された。血は、燃えるように熱い血潮は洪水のように吹き出た。しかし、彼の心にはゆるぎない勇気が秘められていた。この気高い心の持ち主は深手を負い、ひどい苦痛に耐えねばならなかったが、邪心とは無縁であった。このように、太陽に輝く人は夕方になるまで終日鞭打たれた。その勇士の心は再び苦痛に疼いたが、やがて、空で輝く明るい太陽は滑るように沈んでいった。人々は憎むべき敵を牢獄へと連れて行った。それでも、彼はキリストの心の中で大切にされていて、彼の胸は喜びに満ち、心は清く、気持ちはゆるぎないものであった。(1219-1252)

XII

それから、聖者は、勇敢な英雄は暗闇の中で一晩中賢明な思いに耽っていた。吹雪によって地面は雪に縛られ、激しい雹と霰の来襲によって空気は冷え、忍び寄る灰色の兵士のような白霜と霧氷は人々の国を、住民の住まいを閉ざした。大地は凍てつき、水の勢いは冷たい氷柱となって集結し、氷は川の上や輝く海の上に通路を築いた。汚れない名声を保つ貴人は、厳しい苦境の中にありながらも心はずませ、勇気を忘れず、熱心に、忍耐強く、酷寒の夜を過ごした。彼は恐怖に怯えていたが、かつて引き受けたこと、すなわち、神を最も賛美に値するものとして常に心の中で称え、言葉で崇めることをやめることはなかつ

た。やがて、光り輝く天の宝石¹が現れると、兵士たちの一隊が、殺害を好むかなり多くの人々が騒ぎ立てながら暗い牢獄へとやってきた。彼らはその貴人を、信仰心の厚い勇士を、神に忠実な戦士を直ちに怒りにあふれる者たちの手の中へ連れ出すよう命じた。そして、これまでと同様、彼は一日中鞭で激しく打たれた。血が骨の髄から波のように吹き出した。血は熱い水のように流れ出した。傷で弱った体の痛みは止まなかった。そして、英雄の胸から低いうめき声が出てきた。涙は水の流れのように湧き出た。彼は言葉に出して言った。

(1253-1280)

「主なる神よ、万軍の王よ、私の状況をごらんください。あなたは一人一人の苦難をはっきり知っておられます。私の命の源よ、人間の救済者、永遠で全能の慈悲深いあなたはその強い力ゆえに決して私をお見捨てにならないことを私は信じます。また、創造主よ、私の命がこの世にあるかぎり、私はあなたの大切な教えから決して外れることがないよう励みます。永遠の幸福の付与者よ、あなたはすべての人を敵の武器から守ってください。人類の殺戮者、罪の張本人²が悪魔の技を用いてあなたを賛美する人々を虐待し、非難の言葉を浴びせて苦しめることを許さないでください。」(1281-1295)

その時、恐ろしい悪魔、怒った裏切り者がその場に姿を現した。天罰に呪われた地獄の悪魔は群衆の目の前で戦士たちをそそのかし、次の言葉を発した。「住民の敵であるその罪深い男の口を打て！そいつはしゃべりすぎだ！」そして、再び争いが持ち上がり、憎悪が沸き上がったが、やがて、太陽は険しい岬の下へと滑るように沈み、薄暗い夜が高い山々を包み込むように覆った。そして、勇敢な正義の聖者は住まいへと、暗い建物の中へと連れて行かれた。信仰心の厚い人は牢獄の中で、汚い住まいで一晩を過ごさねばならなかった。

(1296-1310)

すると、悪事に余念のない恐ろしい七人の敵の一人、罪の張本人、闇に包まれ、栄光を奪われた残忍な悪魔が館へとやってきた。そして、悪魔は聖者に軽蔑的な言葉を投げつけた。「アンデレよ、おまえが敵たちの手の中へと旅してきた目的は何なのか？おまえが我々の神々の誇りを傷つけた時に傲慢にも掲げ上げたおまえの栄光はどこへ行ってしまったのだ？おまえの指導者がやったのと同じように、おまえは自分一人のために土地と住民のすべてを要求した。キ

¹ 「太陽」のこと。

² 古英語では *fæcnes frum-bearn* 'the first-born child of crime' 「罪の初子」。

リストという名の男はこの世で壮大な栄光を築き上げたが、それもそれが可能な間だけだった。ユダヤの王ヘロデ³が戦で彼を十字架にかけ、命を奪ったので、彼は絞首台の上で魂を絶ったのだ。そこでだ、わしの息子たち、勇敢な家来たち、従者たちに命じる。おまえたちが戦いでそいつを屈服させるよう、槍の先を、毒を塗られた矢を、死ぬ運命にあるそいつの心臓に突き刺せ。堂々と前進し、その戦士の誇りを踏みにじれ！」(1311-1333)

彼らは残忍で、凶悪な手で彼を襲ったが、不動の支配者であられる神は強い力によって彼を守られた。彼の顔に栄光の印である十字架があるのを認めた時、彼らは攻撃することが怖くなり、臆病となり、恐ろしさのあまり逃げ出した。地獄の囚人である大敵⁴は以前と同様、再び哀れな叫び声を発した。「勇敢な者たち、わしの兵士たち、戦の同僚たちよ、これほどのへまをすることは、おまえたちに一体何が起こったのか？」(1334-1344)

XIII

すると、惨めで罪深い古の敵⁵はこれに答え、父親に返事をした。「彼を傷つけ、策略によって死に至らせることは我々にはすぐにはできません。自分がまずあいつの方に行ってください。あの孤独な男にあえてもう一度命をかけるというのでしたら、その場ですぐ争いが、恐ろしい戦いが起こることでしょう。最も親しい勇士よ、あなたが直ちに戦を始め、関の声を上げる前に、その戦いで自分の身に何か起こった時に役立つ助言をいたしましょう。たやすいことですから。戻って、枷に縛られた奴を侮辱し、その惨めさを嘲ってやりましょうよ。あの敵にぶつける言葉はすでにじっくり考えて用意してありますから。」(1345-1359)

すると、苦痛にあえぐ者は大きな声を出し、次のような言葉を発した。「アンデレよ、おまえは長い間、魔術を操ってきた。見よ、おまえは多くの人々を騙し、惑わしてきた。おまえはもうこれ以上その仕事はやれないであろう。おまえの仕業にふさわしい恐ろしい迫害が定められている。疲れて落ちぶれ、喜びを奪われたおまえは、迫害を、厳しい死の苦しみを味わわねばならない。わ

³ Herod (前73頃 - 前4) 前37年、王としての実質的統治を開始し、エルサレム神殿改修工事等、都市や劇場・宮殿などの建設事業に情熱を傾けたが、反面、血縁を次々に殺すという陰惨な影も濃かった。

⁴ 「魔王、サタン」のこと。

⁵ 「悪魔」のこと。

しの家来はすでにその戦いの準備を整え、直ちに、あっという間に、腕づくでおまえの命を奪い去ることになる。わしの意志に逆らっておまえを束縛から解放できるほど力のある奴がこの世の人類の中にいると思うか？」(1360-1374)

すると、アンデレは彼に答えて言った。「その昔、苦しむおまえを燃える鎖で縛った全能の神、人間の救済者はたやすくそれができる。おまえは天上の王のお言葉にそむいて以来、苦悩に縛られ、流浪の中でもがき苦しみ、栄光を奪われているのだ。悪の始まりはそこにあったが、おまえの流浪の旅に終わりは無い。おまえは自分の苦痛を永久に募らせねばならないのだ。おまえの運命はこれからもずっと日ごとに過酷なものとなっていく。」すると、かつて、ずいぶん古い昔、神に激しい戦いを挑んだ者は退散した。(1375-1387)

それから、夜が明け、日が昇ると、異教徒の一団が多くの人を伴って聖者を訪ねにやってきた。これで三度目であるが、彼らは忍耐強い勇士を連れ出すよう命じた。彼らは直ちに勇士の心を完全に挫こうとしたが、それは実現しなかった。そこで、強く激しい憎しみが新たに掻き立てられた。聖なる英雄は日が輝いている間ひどく鞭打たれ、巧みに縛られ、深い傷を負った。そのために、枷に強い者も悲嘆にくれ、神に向かって澄んだ声で叫んだ―彼は悲しみに沈み、泣きながら言葉で訴えた。(1388-1400)

「私は主の掟⁶を称えねばならない空の下で、主のご意志によってこれほど厳しい状況に陥ったことはありません。私の手足は関節が外れ、体は、血まみれの骨の館はひどく壊れています。臆まで達する深手は血を吹き出しています。勝利の守護者、救世主であられる神よ、あなたは一日だけユダヤ人の間で痛ましい姿になられました。そして、命ある神、創造物の王、諸王の栄光よ、あなたは十字架から父なる神に向かって叫ばれ、次のようにおっしゃいました。『天使たちの父よ、光と生命の源よ、お尋ねしたいことがあります。どうして私をお見捨てになられるのでしょうか？』今や私は三日間死のように残酷な迫害に耐えねばならないのです。万軍の神よ、魂の養い主よ、私の魂をあなた自身の手に取り戻すことができますように！あなたは私たち十二名を激励なされた時、私たちがあなたの教えを喜んで実行に移すなら、恐ろしい敵との戦いで私たちが傷ついたり、体の一部分がすぐ切り離されたり、臆や骨が地上に散らばったり、頭から髪が失われることはない、聖なる言葉で約束してくださいました。ところが、今や臆はゆるみ、血は滴り落ち、髪は束は引きちぎられて地

⁶「福音書」のこと。

面に落ち、毛は地面のあちこちに散らばっています。命のことでこんなに苦しむのなら、死んだ方が私にはずっとましです。」(1401-1428)

すると、意志強固な彼に声が届いた一栄光の王の言葉が語った。「最も親しい味方よ、惨めな状況を嘆くな。この恐怖はおまえにとって耐えがたいものではない。おまえを安全に守り、わしの力で保護して包んでやろう。(この世の)すべてに勝る力、戦での勝利がわしには与えられている。事実、わしがこの口から発した言葉の一つでも無効となるのなら、その前に、この美しい創造物、天と地が共に滅びてしまうということを、多くの人々は偉大なる日⁷の集会の場で告げることであろう。さあ、骨が折れ、体が傷つき、それによっておまえの血が流れ、血まみれとなった道を見よ。最も大きい痛ましい傷をおまえに負わせた者たちといえども、もうこれ以上おまえを槍で突いて傷つけることはない。(1429-1445)」

そこで、神と親しい闘士は栄光の王の言葉に従って後を振り向いた。すると、しばらく前に彼の血が流れた所に満開の花で飾られた森が立っているのが見えた。そこで、戦士たちの守護者は言葉で述べた。「人々の支配者よ、あなたに感謝と称賛、天上の栄光が永久にありますように！強力な私の主よ、あなたは苦しんでいる異国人である私をお見捨てになられませんでした。」(1446-1454)

このように、勇者は聖なる声で神を称えたが、やがて、神々しく輝く太陽が波の下へと滑るように沈んでいった。すると、これで四度目であるが、隊長たち、恐ろしい敵は貴人を牢獄へ連れて行き、暗い夜中に人々の指導者の心を、堅固な考えを変えさせようとした。その時、兵士たちの栄光であられる主なる神、人類の父、命の導き手が牢獄に現れ、自分の味方に言葉をかけて慰め、無傷の体を大切にしよう、次のように命じられた。「おまえはこれ以上敵の迫害を受けて苦痛に耐える必要はない。」(1455-1468)

そこで、勇士は束縛と厳しい迫害から解放され、力強く立ち上がり、創造主に感謝の言葉を述べた。彼の美しさは損なわれず、衣服の縁飾りは全く引きちぎられず、頭から髪は抜けず、骨は砕けず、出血している傷は体に見当たらず、また、強い殴打によるいかなる傷も血を流してはいなかった。彼は栄光の力によってこれまでと同様、再び神を称えた。彼の体は無事であった！(1469-1477)

⁷ 「最後の審判」を指す。

XIV

さて、私はこれまで聖者の話とその行為と世に知られた出来事を詩の形にして、言葉に出して称えてきました。彼が長期間にわたって見聞きしてきたこと、彼がその生涯で成し遂げたことを最初からすべて語るのは大変であり、時間がかかり、私の能力を越えるものであります。私以上に神の掟を学んだこの世の人なら、彼が力強く耐えた苦難や敵との戦いは最初からすべて知っているでしょうが、彼が異教の町で多くの迫害と激しい戦いに耐えた話は古くから言い伝えられていますので、私はもう少しこの話について語りしたいと思います。

(1478-1491)

彼は驚くほど頑丈な大きな柱、嵐に打たれてきた円柱、太古の巨人の作が牢獄の壁のそばに立っているのを見た。そこで、力強く、勇敢で慎重な、驚くほど聡明な彼はその柱の一つに向かって直ちに言葉を発した。「大理石の柱よ、創造主の命令に従え。天と地の父が大軍を率いてこの世の人類を訪ねて来られるのをすべての創造物が見る時、彼らはその前で恐れおののくことであろう。さあ、その台座から激しい水の流れを、あふれる川を吹き出させよ。これから全能の神は、天の王は人々を死に至らしめるために、この恥ずべき国民の上に広く遠くまであふれる水を、波立つ洪水を直ちに送り出すよう命じられるであろう。見よ、おまえは金や高価な贈り物よりも貴いのだ。王は、栄光の神は、力の強い支配者はみずからおまえの上に恐るべき神秘を、真の掟を刻み、言葉で明らかにし、十の言葉⁸で表しておられる。主はそれをモーセに与えられ、その後は心の正しい者、彼の親族、勇敢な家来たち、神を恐れる人々、ヨシュア⁹とトビアス¹⁰がそれを守った。その昔、天使たちの王はあらゆる種類の宝石にはるかに勝る贈り物でおまえを飾られたことがこれで分かるであろう。おまえが神のことを多少なりとも理解しているのであれば、直ちにそのことを神の聖なる命令によって知らせるべきだ。」(1492-1521)

すると、一瞬の遅れもなく、その石柱は裂けた。水が湧き出し、地面の上に流れた。夜明けと共に泡立つ波は大地を覆い、洪水は勢いを増した。宴の後、町は大混乱となり、兵士たちは眠りから引き裂かれた。水は深く掻き乱され、

⁸ 「モーセ」の十戒のこと。

⁹ Joshua モーセの後継者の一人で、彼の忠実な従者であった。「出エジプト記」(32.17)、「民数記」(14.4)、「ヨシュア記」(24)などを参照。

¹⁰ Tobias 「トビト書」の主人公トビトの息子。ヨシュアとトビアスがここに登場することの問題については Brooks (1961:113) 参照。

地面を覆った。人々は洪水の急襲に恐れおののいた。呪われた者たちは滅びた。海上の若者たちは激しい水の攻撃に合い、塩水の底へと運ばれた。それは深い悲しみ、苦い酒盛りであった。杯を運ぶ者たち、給仕たち¹¹は直ちに、ためらうことなく、その場で夜明けからすべての人々に飲み物をたっぷり用意した。

(1522-1535)

水の勢いは増していった。人々は、老いた槍兵たちは嘆き悲しんだ。彼らは黄色い水の流れから逃れ、命を守り、山の洞穴に、土の住まいへと逃れることを願ったが、天使がそれを阻止した。一天使は激しく燃える炎で、荒れ狂う熱い火の海でその町を包み込んだ。打ち寄せる洪水は町の中で荒れ狂った。人々の集団は水の砦から脱出できなかった。波は高まり、洪水は轟き、火花が飛び、水の流れは大波であふれた。町の中では悲しみの歌が唄われ、恐怖に襲われた多くの者は苦悩を嘆き、挽歌を唄うのがはっきりと聞き取れた。恐ろしい大火、激しい破壊、不気味な物音がありありと見聞きできた。火は空中を飛びながら壁を取り囲み、水かさは増した。(1536-1553)

その町では人々の大きな泣き声、人類の悲痛な叫び声が遠くまで聞かれた。その頃、その町では非力で惨めな一人の男が人々を呼び集め、落胆し、嘆きながら語った。「我々はこれまで不当にも牢獄で異国人に枷をはめ、拷問で苦しめてきたが、厳しく恐ろしいおまえたちも今やつとその事実気付いたであろう。運命が我々を痛めつけるであろうが、今ここでそのことがはっきりした。わしが正しいと思うことに従い、我々が全員一致して彼を束縛から解放し、我々の救済と慰めと安心を聖者に願おう。これは何よりもはるかにいいことだ。善は急ごう。我々が彼を訪ねれば、悲しみの後の安らぎが直ちに我々に用意されるであろう。」(1554-1568)

そして、人々の行動が、傲慢な者たちの力が、兵士たちの強さが抑えられたことはアンデレにもはっきりと分かった。水は彼らを包み、激流は押し寄せ、洪水は荒れ狂い、やがて逆巻く洪水は兵士たちの胸を越えて肩まで達した。そこで、貴人は激しい水の流れが崖の近くで止まり、嵐が静まるように命じた。大胆で勇敢な人、聡明で神に愛された人は直ちに外に出て、牢獄を離れた。すると、直ちに、水の流れていた所に彼のために道が開けられた。その勝利の場所は、彼が足で踏みつけた時、穏やかとなり、大地から洪水が引き、どんどん乾いていった。苦しみの後に救いが現れた時、市民たちは心の中で幸せを、胸

¹¹ いずれも「洪水」の比喩。

の中で喜びを感じた。聖者の命令によって、海はなぎ、嵐の音は静まり、海路は穏やかになった。その時、山は大きく裂け、恐ろしい洞穴となり、洪水を、黄色い波を吸い込んだ。大地は流れ騒ぐ水をすっかり飲み込んだ。彼は波をその中に沈めただけではなく、群衆の中の最も邪悪な者たち、すなわち、十四名の悪に染まった敵も波と共に破滅へと、地の底へと急がせた。すると、それらの人々の後に残された多くの人々は恐怖に襲われ、狂乱状態となった。悪事に汚れ、大罪を犯した兵士たちが地の底へと消えた時、人々は女や男たちの死、厳しい運命の時、より悲惨な刻限を予期した。(1569-1600)

そこで、彼らは全員異口同音に言った。「人々の助けとして、かつてここへ使者を派遣してくださった真の創造主、万物の王が力強く支配しておられることがこれではっきりとした。今どうしても必要なのは我々が有徳の土に喜んで従うことである。」(1601-1606)

XV

すると、聖者は人々を慰め、大勢の兵士たちを言葉で激励した。「罪深い者たちはその行為にふさわしい破滅を選び、死という罰を受けたが、あなたがたは恐れすぎることはない。正しい考え方をすれば、輝かしい栄光の明かりはあなたがたに示されるであろう。」(1607-1612)

そして、彼は願ひ事を神の御子の前へと送った。しばらく前に洪水に襲われ、海の上で命を落とした若者たちのために、彼らの靈魂が恵みをなくし、栄光を奪われ、苦痛に満ちた破滅へと、悪魔たちの支配へと運び去られないように救いの手を差し伸べてくれるよう、彼は聖なる方に訴えた。そして、清い魂を持った人の言葉の後、その願ひは全能の神に、人々の支配者へと喜んで伝えられた。そこで、神はしばらく前に海で死んだ若者たち全員に無傷のまま地面から立ち上がるよう命じられた。伝え聞いたところによると、まだ幼い多くの子供たちは、先ごろ洪水に襲われてあっという間に命を落としたものの、彼らの肉体と魂はその場で一体となり、急いで一斉に起き上がった。彼らは苦痛から解放され、洗礼と平和の契約、栄光の保証、創造主の庇護を受けた。そして、王に創造された勇敢な人は、父なる神の洗礼によって若者たちがよみがえった所に、洪水が発生した場所に教会を建て、神の社を設けることを命じた。

(1613-1635)

すると、喜びにわき立つ町のあちこちから人々が、勇敢な兵士たちとその妻たちが共に大挙して集まった。彼らは誠心誠意従い、神の意志どおり速やかに

洗礼の沐浴を受け、偶像崇拜と古い異教の神殿を捨てるつもりであると言った。そして、人々の中で、兵士たちの間で洗礼の儀式が厳かに営まれ、町の住民が見守る中で神の正しい掟が、その国の戒律が制定され、教会が奉献された。神の使者は輝かしい町のその教会において、プラトーン¹²と呼ばれる一人の言葉の使い方に秀でた賢い男を司教に指名し、大勢の前で使徒の名において彼を聖職に任じた。そして、彼らがその司教の教えに喜んで従い、魂の救済を実行するよう、彼は熱心に説いた。彼はその豊かな町、人々の祝宴の喜び、高価な宝物、輝く宝環の館から立ち去り、浜辺の船に行きたいという強い希望を打ち明けた。指導者がこれ以上留まってくれないということは、多くの人々にとって耐えがたい苦しみであった。その後、栄光の神、万軍の主がみずから航海中の彼の前に現れ、次のように語られた。「人々を罪から（・・・）¹³。彼らの魂は離れていこうとしている。彼らは男も女も共に悲しんでいる。彼らの泣き声、嘆き悲しむ声がわしの耳元を通り過ぎていった。新たな喜びに浸っている群衆を見捨てることなく、わしの名を彼らの胸にしっかりと植えつけよ。兵士たちの守り手よ、喜びにあふれる町に、立派に飾られた館に七晩の間留まれ。その後、わしの恩寵を受けて船出せよ。」（1636-1674）

そこで、勇敢で力の強い人はメルメドーニアの町をもう一度訪れた。キリスト教徒たちが栄光の使徒、高貴な王の使者を自分たちの目で見た時、彼らの言葉と分別は豊かになった。そして、彼は人々を導いて信仰の道に入らせ、栄光で包んで激励し、幸せあふれる無数の人々を天国へと、父と子と聖霊が三位一体の栄光の中で光輝に満ちた住まいを永遠に支配しておられる天の王国へ、聖なる住まいへと導いた。さらに、聖者は異教の神殿を清め、偶像崇拜を捨てさせ、異端を退けた。アンデレの優しい教えによって多くの人々が心から喜んで異教の神殿を離れ、楽しい幸福の場へと、悪魔や敵意ある魂が決して歩むことのない地上の道へと向かうのを見ることは、魔王にとって耐えがたい苦痛、大きな胸の疼きであった。（1675-1694）

その後、神が彼に居心地のよい町に留まれと命じられた日の数が主の掟に従って過ぎ去った時、彼は喜びにあふれ、身支度を整え、船出の準備をした。彼はもう一度船でアカイアに行き、そこで自分の魂との訣別、戦いでの死を迎え

¹² Plato アンデレに任命されたメルメドーニア最初の司教。その他は不詳。

¹³ 以下、文法や意味がしっくりいかないのは原典に若干の欠落があるものと思われる（Brooks 1961: 117）。

ることを願った。しかし、このことは殺害者にとって歓喜とはならず、殺害者みずからが地獄の入り口へと旅することとなった。その後、その殺害者は罪に汚れ、友を亡くし、慰めを得ることは決してなかった。(1695-1705)

さて、私が聞いた話では、悲嘆にくれた人々は大勢で敬愛する師を船の舳先まで案内したそうである。その場では、多くの人々の心の中に熱く燃えるものがこみ上げていた。彼らは行動力に富む兵士を海の岬の近くに停泊している船の中へと案内した。彼らは最も勝れた貴人を波の上で、あざらしの道の上で眺めることのできる間、泣きながら浜辺に立っていた。そして、彼らは栄光の主を称え、大勢で叫び、次のように言った。「すべての創造物の永遠の神は一つである。その力と技は地上の至る所で広く崇められ、その栄光は天の王国の中ですべての清い人々の上で、天使たちの間で、美しく、神々しく、永遠に果てることなく輝く。それは高貴な王なのである。」(1706-1722) (完)

参考文献

- Brooks, Kenneth R. (編) 1961. *Andreas and The Fates of the Apostles*. London: Oxford University Press.
- Cook, A.S. et. al. (訳) 1970. *Translations from the Old English*. Hamden: Archon Books.
- Fujiwara, Yasuaki (藤原保明). (訳) 2000. 「古英詩『アンデレ』(一)」『言語文化論集』第54号, 207-220頁.
- _____. (訳) 2001. 「古英詩『アンデレ』(二)」『筑波英学展望』第20号, 155-168頁.
- Gordon, R.K. (訳) 1954. *Anglo-Saxon Poetry*. (Everyman's Library 794) London: Dent & Dutton.
- Hazome, Takeichi (羽染竹一). (編訳) 1985. 『古英詩大観』東京, 原書房.
- Krapp, George Philip. (編) 1932. *The Vercelli Book*. (The Anglo-Saxon Poetic Records Vol. II) New York: Columbia University Press.
- Lambdin, Robert Thomas, and Laura Cooner Lambdin. (編) 2000. *Encyclopedia of Medieval Literature*. Greenwood Press: Westport, Connecticut and London.